

## 平成 29 年度大阪府依存症関連機関連携会議第 3 回依存症地域生活支援部会

### 【議事概要】

#### 依存症関連機関・団体紹介冊子作成について

##### (1) 冊子案の内容について

- ・ P 5 の各依存症の説明で、薬物依存症だけ「である」調になっているので、文体をそろえてほしい。
- ・ 表紙のタイトルは、例えば、「広げよう依存症 回復・治療・支援の輪～みんなで知っておきたい関係機関・団体紹介冊子」というのはどうか。
- ・ 大阪市の酒害教室や、各区の保健福祉センターでやっている専門相談も載せてほしい。
- ・ ギャンブル依存症の治療をしても、ここに記載されていない医療機関がある。ギャンブル依存症に対する診療報酬が少ないのが原因。アルコール依存症の次に多いのがギャンブル依存症。診療報酬の問題が大きいので、保健所などの公の力でもっと支援してほしいと思う。
- ・ ギャンブル依存症を、遊技や宝くじ、違法賭博を含めて、国にならって「ギャンブル等依存症」にしてはどうか。
- ・ ギャンブル等の「等」は明言はないが、一般的な市民感覚としてわかりにくいので、等が何をさすのかを入れた方が親切かと思う。
- ・ 去年、内閣府が実施したアルコール依存症に関する世論調査結果で、アルコール依存症が疑われる場合、相談窓口を知っていても相談しない理由の二番目に、「どのような対応をしてもらえるか不安だから」というのがあった。P 5 の依存症の説明の中で、具体的に今の状態が依存症にあてはまるかを知らせることができればいいと思う。
- ・ P 4 の目次の回復施設の大阪マックについて、本人だけでなく家族からの相談にも対応しているので、対象に家族も掲載してほしい。
- ・ ギャマノンの対象を、「家族・友人」としてほしい。
- ・ P 5 のギャンブルのところ、「賭博」とあるが、「カジノ」「ルーレット」と具体的にするほうがよいのではないか。困っている家族もこれを見て「あてはまる」と思えるのではないか。
- ・ 今はインターネットで情報にアクセスするので、インターネットとどうリンクさせるのかが大切。URL を見せてもアクセスが面倒なので、QRコードを掲載してはどうか。
- ・ 各団体の詳しい情報は各団体のホームページで見てもらえばよいのではないか。
- ・ インターネットからも情報にアクセスできるよう、この冊子のデータもこころの健康総合センターのホームページに掲載するようにしたい。
- ・ GA につながっている仲間の 9 割はパチンコ、パチスロへの依存。国は遊技と言っているが、一日に数万円負けるのに、ギャンブルでないというのが間違い。パチンコ、パチスロをギャンブルとして記載したらよい。

##### (2) 冊子の活用について

- ・ 保健所から断酒会に電話で例会があるかどうかの問い合わせはよくあるが、どういう人が例会に参加するかは言わない。本人と直接電話で話すことができれば、例会の会場へ

の行き方も話すことができる。本人が行きやすくなるような雰囲気を整えてほしい。

- ・ダルクに入る相談のほとんどが覚醒剤であり、司法が関わっている人が多い。来年にはほとんどの人の刑が一部執行猶予になる。大阪、神戸の保護観察所に行って300人くらいの人に出会っているが、一人しかダルクにつながっていない。人と人が出会う時間がなくなってきた。つなぐというのは、依存症で困っている人に自助グループや回復者が人と人として出会う場を作ることが必要。ネットワークができると、当事者と当事者が出会う場が失われていく。こういう会議はいいと思うが、実際に役に立つかは疑問。
- ・家族は本人に対して怖いという感覚をもっている。実際、家族のそういう状況に対して、介入をどうしていくかが課題。言いたいけど言えない状況の中でできるだけ早い発見が大事。
- ・本人に話をしてもなかなか自助グループには来ない。本人はギャンブル場にいる。私もつながるのに何十年もかかった。保健所や病院や学校はたくさんあるので、公の場で早く発見してほしい。自助グループは本人を引っ張ってくることはできないが、魅力で惹きつけることができる。
- ・テレビCMで、「〇〇でお困りの方はここに相談してください」と周知するのが本当は一番早い方法。
- ・当事者や家族でない人が来ても、「こういうところがあるよ」と教えてくれるよう、相談先が広まってほしい。
- ・依存症を3つまとめて冊子にしたのは初めての取り組み。P5に依存症の啓発もあって、初めて見る人にはよいと思う。また、行政が発行するのは安心感があってよい。懸念する点としては、これを見たときに相談できるところがたくさんあり、家族はどこに電話したらいいかわからず困るかもしれない。また、相談を受ける方も現場を知らずに安易に丸投げするところもあると思うので、きちんとしたつながりができるような取り組みが必要。
- ・それぞれの機関でできることを一緒に探しながら考えていく連携がいる。顔の見える関係が機関同士であればいいと思う。
- ・相談に来たときに、途切れない関わりが丁寧にできるかどうか的大事。相談先で「家族だけでもどうぞ」と言われれば安心するし、どんな場所か家族だけ見に来てもらうのでよい。
- ・行政がこの冊子を作ってくれるのはありがたい。家族は書籍や新聞、インターネットで検索し、偏った情報に頼ることがある。よくわからずに利用して、法外なお金を要求されたりしている。
- ・相談を受ける側の力量が大きく影響する。困っている人がいたら、「これを読んで」ではなく、「読んでみてわからないことがあったら、私ができる範囲で答えるよ」と言ってくれとうれしい。対応の礎になるような冊子になればうれしい。
- ・私も自助グループにつながって20年以上になるが、あの時は真っ黒なトンネルの中にいた。保健所に電話しても、「名前、住所は」と聞かれる。結局、中身は伝えられなくて電話を切った。電話を切ってからつながるまで、何年も経ってしまった。相談を受ける側のスキル、感性がすごく大事。そして繋ぐために顔の見える関係がとても大切。
- ・配布された先で活用されてほしいし、机の上に置かれたまま活用されないともったいな

い。配布先に、研修を行うなどの対応が必要。

- ・ 自助グループにつなぐときは、会場への地図を用意しておくことも必要。以前、私が自助グループに繋ぐときは、本人の承諾を得た上で紹介状を書いていた。相談を受けた人が本人や家族にとっては大きな社会資源となる。単に情報を伝えるのではなく、今の苦しみ、問題に関わっていく最初の人であるという気持ちが必要。
- ・ 冊子だけでは不十分な部分がある。今度は人材を養成して、資質をあげて、車の両輪にしてほしい。

### 家族支援について

- ・ 依存症の相談では、一番初めに窓口に来るのは家族。本人が登場するのにはだいぶ時間がかかる。家族が相談しているうちに本人が登場する。
- ・ 困っている家族がいれば、家族にできることを考え、家族だけで病院を見に来てもらったり、家族教室に参加してもらったりして、アルコール依存症の知識を得てもらい、家族の体験を語ってもらう。
- ・ 家族には、「家族のしんどさ」を「わかってもらえなかったしんどさ」があるので、自助グループの家族に出会い、つながってもらいたい。
- ・ 当事者はギャンブルで多重債務に悩んでいる。そんなときに、まず借金を何とかしないとイケない。ギャンブル依存症のことを知っている弁護士や司法書士に出会い、自助グループや医療をすすめてもらえれば、言うことをきいていたかもしれない。
- ・ 依存症ビジネスが増えた。一日2万円請求されたり、施設に入るのに月20万円かかると言われている人がいる。明らかに貧困ビジネスみたいな被害を受けている。そういう施設とつながっている自助グループ等から、多額の献金を要求されている家族もいる。そういうものに巻き込まれないような家族対応を行政や医療はしてほしい。このグループは大丈夫だとか、一度、二度、見に行ってみて大丈夫かどうか確認してほしい。
- ・ ミーティングの場所で悩んでいる。病院や区役所など、お金がかからずミーティングが開けるような場所がたくさんあればいい。
- ・ 支援者には、自助グループについながれば回復すると確信をもってもらえればと思う。
- ・ 家族は働いていることが多い。夜のミーティングは一人、二人しか参加できない時もある。
- ・ 相談につながるきっかけを多く作ってほしい。ポスターも冊子も目にとまるように、記憶に残るようなものであればと思う。パソコンやスマホが使えない人もいる。
- ・ 「どこに行ったらいいのかわからない」「どうしたらいいのかわからない」というのが家族にとってしんどい状況。頭の中に何か情報があると、つながっていくと思うが、思い出しても電話をかけるまでに時間がかかる。
- ・ 家族会に行き続けられるのは、その中のつながり、家族間のつながりがあるから。人と人とのつながり、自助グループを越えた人間同士のつながりでつながっている。
- ・ 社会資源を家族に伝えていくときに、こういう冊子があるのはとても助かる。それと同時に、支援する側のスキルアップが必要。
- ・ 実際支えてくれたのは家族。自助グループに来る家族には、対応方法をアドバイスとして伝えている。大阪でももっと保健所の職員への研修をする必要がある。

- ・アルコール依存症の人の中には、子ども時代に依存症の家族がいる家庭で育っている人が3～4割いると言われている。家族の相談は配偶者が大半だが、子どもを救うということに踏み込んでいかないと変わらない。
- ・虐待やDV等の問題と依存症関連問題がつながってほしい。依存症の相談支援センターを作って、地域単位できめ細やかな支援が届くネットワークが必要で、全体の見守りとスーパーバイズできる体制も必要。
- ・今までの家族支援にあてはまらない人も出てきている。DVが絡んでいたり、裁判を控えていて保釈中の人の家族への支援、そして、本人は回復施設につながっているが発達障がいや高次脳機能障がいなど、他の障がいがある人の家族への支援が必要。
- ・家族のスタイルも様々になってきている。セクシャルマイノリティの家族への対応も必要で、家族会を紹介してもしゃべれないと言われる。ゲイのパートナーからの電話を受けた人がとんでもない対応していることもある。LGBTのパートナーからの相談があったとき、どう受けるかという研修がいるのではないか。ヘテロセクシャルのパートナーと比べると、相談しにくく、ヘテロセクシャルのふりをして相談していたりする。全面的に受け入れた上での相談でないという意味がなく、そこを強化していく必要がある。
- ・自助グループなどに紹介して一回だけの電話で終わるのではなく、「どうでしたか」と聞けるといい。アルコール依存症の場合は、医療機関でも家族教室をやっているところが多いので利用できるし、断酒会は「家族とともに回復」を掲げている。ただミーティング会場が遠方だと交通費もばかにならないので、ミーティングができる場所を確保してほしい。会場費も負担になる。
- ・家族からの相談を受けることがあるが、名前を聞かれて嫌な思いをしたり、冊子をポンと渡されてどうしたらよいかわからなくなったりした経験を聞いて、支援する側も話の聞き方など基本的なことを知らないといけないことがわかった。
- ・依存症の人への支援は家族支援から始まる。各保健所が窓口となって、家族相談を受けること、家族支援のグループをつくる必要がある。専門職による援助と、自助グループの両輪があって、家族は回復する力をつける。また、専門職の仕事の一部を自助グループが担っているわけではない。自助グループの協力を得て、家族支援グループをやる必要がある。
- ・薬物依存症、ギャンブル依存症では定期的な家族支援がほとんど行われていない。家族支援グループを定例化して、月1回でも話を聞いてサポートしてくれるような家族支援のグループが必要。依存症ごとになると開催回数が多くなるので、アルコール、薬物、ギャンブルの3つを対象とした家族支援グループでもよい。定例化することで、切迫したニーズに応えることになる。